令和8年 4月5日

# 中田図書新聞

第 82 号

ＢＯＯＫＳなかだ 掛尾本店・コミックラボ 富山市掛尾町１８０-１ TEL076-492-1192

■写真家として山に登るということ■歴史は繰り返すもの■日本人と火葬■地方の食は魅力の原石■カケオくん四コママンガ

## 写真家として山に登るということ

現在の日本の登山家・冒険家で、その旅の質及びそれを文章化する力において突出した人物を挙げよと言われれば、真っ先に思いつくのは服部文祥と角幡唯介だ。昨年の「新潮」十月号と十二月号の二回にわたり、このお二方に写真家の石川直樹を加えた鼎談「書くという営為とサバイバル」が掲載され、楽しく読んだ。その中で気になったのが、石川が話題の中心となったパートで出た「八〇〇〇メートル峰登山の新潮流」と「真の山頂問題」だ。前者は外国の登山隊を支えるだけの存在だったシェルパに、自分達のために登ろうという若い世代が現れ、刺激的な登山をやっているという話。後者はこれまで頂上と思われていた場所が、ドローンの映像からはっきり低い場所であることが判明したり、頂上ではない「認定ピーク」で引き返しても登頂とみなしてきた悪しき習慣が、近年ヒマラヤ登山界で問題となっているという話。

「世界には標高８０００メートルを超える山が14座ある」で始まる石川の『最後の山』が第七十七回読売文学賞を受賞したのを機に手に取った。

個人的に服部・角幡に比べ、石川にはどこか優等生的でスマートな印象を持っていたため今まで敬遠してきたのだが、その不明を恥じねばならない熱き傑作であった。石川はその14座すべてに登頂し生還してきたのだ。

二〇〇一年エベレストに二三歳で初登頂、一一年二度目のエベレスト、一二年マナスル、一三年ローツェ、一四年マカルー、一五年と一九年にＫ２に挑むも撤退、すぐさまガッシャブルムⅡ峰、その後コロナ禍でヒマラヤへ入れない期間を挟み、二二年はなんとダウラギリ、カンチェンジュンガ、Ｋ２、ブロードピーク、二度目のマナスルと五座に登頂、二三年アンナプルナ、ナンガパルバット、ガッシャブルムⅠ峰、チョオユー、二四年のシシャパンマで14座だ。

「コロナ禍のあたりまでは、14座に登ろうと考えたことは一度もなかった」と石川は言う。そんな石川を変えたのが先に述べた若きシェルパ達だ。コロナ禍で仕事を失った彼らはそれをチャンスと捉え、自分自身の遠征を始める。それがＫ２冬季世界初登頂の偉業を生む。その一人ミンマＧ（ネパール人初の無酸素14座完登を目指す）との出会いと、ザイルパートナーとなるペンバ・テンジンとの友情が石川を動かす。彼らの「高峰登山の新しい流れを生み出す現場」を「間近で記録していきたい」と思い、そこに真の頂上問題も絡んで、「自分の体でもって経験しない限りはわからない」と考えるようになった（マナスルに二度登っているのは、最初の登頂の間違いを正すためだ）。

悲劇も起こる。八〇〇〇メートル峰では人はあっけなく死ぬ（アンナプルナでは登頂者に対する死亡者の割合は14％！）。そんな過酷な環境下でも石川は写真を撮り続けた。それも決して小さくはない古い中判のフィルムカメラで。何度も途中で捨てたくなったと言うが、「登山家としてではなく、写真家として登っている」という思いだけがそれを押しとどめ、14座すべてを記録することができた。

本書の終わりに「写真が持つ力」が実に効いているエピソードが二つ置かれているのだが、ここでは何も書くことは出来ない。読み通してぜひとも味わってもらいたい。 ㊊

## ありったけの夢をかきあつめ

南海の無人島から自宅の押し入れまで、我々は「お宝探し」にロマンを抱く。目的は考古学的、美術史的に重要な発見や、一攫千金まで様々だ。しかしながら、伝説の宝の地図は落書きであったり、手間に見合わない収入にしかならなかったりすることがほとんどだろう。そんな中で、確度、難易度ともに高い宝探しが「沈没船探索」である。沈没したという確かな記録があるかわりに、船が沈むような危険な海に潜る必要がある。ところが、『沈没船は知っている』を読めば自室で大海原に旅立てる。あなたも本書を読み、宝探しの船旅に出てみないか？

宝探しと思って真っ先に思い浮かぶのは、埋蔵金の類だろうか。あるいは王墓の埋葬品だろうか。それらと沈没船の積荷との最大の違いは、「長期的な保存を目的としているか否か」である。例えば商船に積まれているのは当然、商材だ。取引相手に渡ることを目的として積まれている。壺や食器など、華やかさはなくとも、そこには人々の生活や文化があり、ゆえに金銀宝飾より如実に当時を物語るのである。

本書は、著者 デイヴィッド・ギビンズが実際に潜り、調査した十二隻の船を主軸に、そこで発見した積荷、そして積荷にまつわる歴史的な流れが描かれている。扱われる沈没船は、紀元前二千年前の商船から、第二次世界大戦下の汽船までバラエティに富んでいる。それぞれの船の積み荷は、どこで作られ、どこに、なぜ運ばれるのかという歴史的背景がある。それが沈没によって、海底で静止してしまった。いわば偶然作られたタイムカプセルだ。そのため、本来であれば消滅していたであろう物品さえも残されていることがある。精錬技術やその貿易を伝える金属の塊や、失われた英雄の名前の発見は、沈没船探索の醍醐味といえるだろう。

発見された物品が、時に書き残された記録より雄弁に物語を伝える。ある古物を触るとき、その裏側に隠されたストーリーに思いをはせるのもいいかもしれない。 ㊗

## 歴史は繰り返すもの

都会へ旅行に行った際には、美術展を見るようにしている。しかしながら、見に行く美術作品には詳しくない。予備知識のないまま会場にて絵画を眺める方が新鮮に感じて楽しめるからだ。

今回紹介する『美術館強盗事件簿』には十か国で起きた十の名画

【書誌情報】・『最後の山』（石川直樹 著／新潮社）¥2,200・『沈没船は知っている』（デイヴィッド・ギビンズ 著 桐谷知未 訳／河出書房新社）¥ 2,900
・『美術館強盗事件簿』（フィリップ・デュラン著 神田順子、田辺希久子 訳／草思社）¥2,600

※価格は全て本体価格です。

盗難事件が紹介されている。昨年ルーブル美術館の強盗事件の記憶も新しく気になる人も多いのではないか。

ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」やムンクの「叫び」などの盗難事件が書かれているが、経緯や顛末が淡々と記載されているのではなく、盗難を見つけるまでの画家の日常、政治的混乱の様子や果てには犯人の気持ちなどが描かれ、さながらミステリー小説のように感じた。

いずれの事件も盗むときの描写は壁から外して普通に持っていくだけの事が多く、ドラマチックな盗み方は漫画の世界だけで、現実は実にシンプルだ。

かつてムンク展を見に行った事を覚えている。例によって予備知識のない私は「叫び」くらいしか知らなかったが、あまりの迫力に圧倒されて珍しく何周も見て回った。そんな「叫び」もかつて強奪され、おとり捜査の末に返還されたというバックボーンを知ってから見た方が感慨深かったに違いないと思うと、次回からは少しだけ調べてから見ようかなと思うのだ。

## はるか過去から学ぶこと

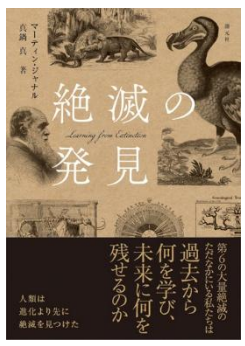
先日、国立科学博物館で開催されていた「大絶滅展」に行ってきました。混雑中の表示があるものの、チケットの提示までは並ぶこともなく進めました。そこまでの混雑ではないのかと思ったのも束の間、会場内は前に進むのもやっとで、展示物を見るのも一苦労でした。図録も売切れで、予約はしましたが、届くまでは時間がかかりそう。

図録が届くまで待ち遠しい中、タイトルに惹かれて手に取ってみたのが本書『絶滅の発見』です。

絶滅した巨大生物の展示は昔から人気だったようで、中には捏造された生物の展覧会もあったようです。そのような展示も、聖書の巨人・怪物に関連づけられ成功していたというのは驚きですが、当時と今の感覚の違いが感じられて興味深いです。

人類は進化より先に絶滅を発見していました。ドードーの事例や、化石の発見は進化論が世に広く知られる前でした。しかし、生物が姿を消してしまうという事実は把握していても、その重要性や正しい理解はまだなかったと言えます。『種の起源』の発表をはじめ、様々な発見や科学分野の発展によって、生命の長い歴史とその連続性が明らかになりました。

現在は六回目の大量絶滅のただなかにいると言われています。自分の身の回りを思い浮かべても、いろいろな生き物が減ったような実感があります。人類は多くの生物、自分自身さえも絶滅させる可能性がある一方で、それを理解もしています。過去から学び、未来のために何が出来るかを考えてみたいと思います。




## 触れたら／終わり

二〇二〇年代ホラーのメインジャンルと言えばモキュメンタリーということになるが、振り返ってみると令和に生まれたわけでもない。一九九九年には映画「ブレア・ウィッチ・プロジェクト」があり、二〇〇七年には「パラノーマル・アクティビティ」があった。二十年前にはモキュメンタリーという言葉がなかっただけで、そのようなものは存在していた。歴史は繰り返すというが、ホラーブームもまた繰り返されていると思わずにはいられないのが『日本ホラー小説史』である。今でこそホラー＝恐怖だが、ホラーという用語が広く使われるようになったのは一九八〇年代から。それまではホラーと聞いてほら話と勘違いする人もいた。一般的な言葉になって数十年しか経っていないことに驚きだ。かつては「怪談」が現在のホラーという意味を担っていたようである。

著者は①一九四五～五〇年代、②一九五〇～六〇年代、③一九六〇～七〇年代、④一九八〇～九〇年代、⑤二〇〇〇～二〇年代という五つに区分する。①におけるホラーの代表例と言えば探偵小説である。江戸川乱歩の「怪談入門」というホラー小説ガイドによって従来、探偵小説だったものがホラーとしての価値を与えられることになった。戦後のホラーは探偵小説から始まるということである。確かに乱歩「人間椅子」はホラー要素のほうが強いし、〈少年探偵団〉シリーズはポプラ社のおどろおどろしいカバーと合わせて、当時の子どもたちを恐怖させただろう。今でいうところのホラーミステリ。やはり言葉がなかっただけで。他の年代においても特徴と代表作が明記されるので、それらを読むだけでも飽きない。同著者の『現代ホラー小説を知るための100冊』『怖い話名著88』を合わせて読めば、ホラー小説の沼から這い上がることはできないだろう。

なぜ恐怖を感じるのか。人は自分の知らないことを経験する際に恐怖する。ホラーに触れるという体験が増えるにつれて恐怖は感じなくなるだろう。だが、別の何かは敏感になるかもしれない。たまに視えるときがある。だれもいないのに気配を感じたときは、背後にいるのではない。上にいる。試してみるといい。

## 日本人と火葬

誰もが自分らしい生き方を自由に選べるようになった時代、葬儀や埋葬の方法も自分の意志で選択できるようになりました。明仁上皇ご夫妻が、国民負担の軽減や御陵用地の不足を理由に、「自身は火葬を選択したい」とお気持ちを述べられたことも象徴的です。なお、天皇の死後の埋葬は土葬がずっと続いており、火葬だと約四百年ぶりとのこと。

日本人と火葬のエピソードに関しては、痛ましい東日本大震災で、おびただしい遺体が土葬で仮埋葬されました。しかし、ほどなく、遺族の希望で遺体を掘り起こし、火葬にして〈お骨〉にするというとても大変な作業が、一～二年かけて行われました。被災地で火葬場が足り

【書誌情報】・『絶滅の発見』(マーティン・ジャナル　著　真鍋真　訳／創元社)¥2,800　・『日本ホラー小説史』(朝宮運河　著／平凡社新書)¥1,000
・『火葬秘史』(伊藤博敏　著／小学館)¥1,800
※価格は全て本体価格です。

ず、東京都が都の火葬場の使用許可を出して援助するということもありました。衛生面、費用の面、狭い土地の活用ということもありますが、火葬というのは日本人の心にしっかり結びついているようです。

世界的にも費用面などから火葬は広まっています。キリスト教圏で土葬のイメージが強い欧米諸国ですら、火葬率が急速に高まっているとのこと。ただし、〈綺麗な骨〉にして骨壺に丁寧に収めるというのは、日本独特で、その為の火葬場の技術の確立や工夫、努力があるというのは、興味深い話です。

日本の近代以降の斎場の成立やその後の発展には、明治の政商や、昭和の剛腕経営者が登場し、有名な政治家や事件なども絡んできます。東京都で敬虔な僧侶によって経営されていた火葬場が近年になって資本の論理に巻き込まれていますが、これは時代の流れでしょう。人の死に携わる仕事が、ケガレとされてずっと差別の対象だったことも考えさせられます。現代になっても残っているようで。これは過去の歴史としなくてはいけません。

なお、自分らしさを選択できる自由の代償として、無縁になった結果の孤独死も増えています。自分はどのような最期を迎え、どんな葬儀や埋葬を選択したいのか？『火葬秘史』は、そんな漠然したことの在り方について真剣に考えるきっかけになる濃厚な力作です。（矢）

## 死んだらどこへ

日本の火葬普及率は99.9％を超えているとのことですが風葬・土葬を行う土地は今もまだあるようです。本書『日本の自然葬』は沖縄の粟国島や与那国島の風葬、アイヌの土葬の伝統的な葬儀の手順から事細かに記録されており、それぞれの弔いの儀式や死生観が垣間見られ考えさせられます。

散骨・樹木葬のほかに、「循環葬」なる新しいタイプの自然葬があり紹介されています。細かくパウダー状にした遺骨を土に混ぜ込み樹木の根本に埋め込む。そしてその森全体の栄養分となって自分の命が循環するというもの。費用は生前契約者で七十七万円です。お墓がないので継承者が不要で維持費もかかりません。ただ遺骨をパウダー状にすることに抵抗を感じる方は多いかもしれません。

自分がそうなったときのために埋葬方法が選択できるよう紹介されている部分があり、さらに興味深く読める一冊でした。（治）

## 選択し生きる

タイトルが「生きる」ではなく「生きる」となっていることに目が留まりました。

落合恵子さんといえばクレヨンハウスの絵本や児童書専門店の事業が一番に頭に浮かび、自分の考えをきちんと表現し異議を申し立てる人というイメージがありました。そんな落合さんががんと診断され、治療をし、再発の不安を抱えつつ病状が落ち着いた現在までが書かれています。

生涯でがんにかかる人は二人に一人といわれるようになって久しい気がします。病気とどう向き合うのか、何をして何をしないのか選択することの重要性を、著者は描きます。しかし告知された時の精神的ダメージは大きく自分だったらどうなるのだろうと考えながら読みました。

「がんであるということは私の一部でしかない。病に私の精神まで占領されてなるものか」、落合さんの生き方を表している言葉であり、この先も自分のやりたいことをもち、タイトルのように人生を『生きる』人でいてほしいと思いました。

（京）

## どうすればよかったか？

表紙の写真は還暦の父を祝う、一見なごやかな家族の風景だ。だが実は、中央の若い女性（姉）は統合失調症の症状に苦しんでおり、横の両親はそんな彼女を医療にかからせず、この状況に為す術がない弟はカメラから目をそらす。

本書『どうすればよかったか？』は弟である著者が、家族の歴史をたどりながら、統合失調症の姉への対応と母・姉・父を看取った後ドキュメンタリー映画として世に出した思いがつづられている。

姉が統合失調症を発症したころ、著者は高校生。彼は病院に連れていくべきと一貫して考えていたが、医者である両親（精神科医ではない）が頑なに反対。著者が姉を医療につなげることができたのは、発症から二十年以上経って両親が高齢になり世話できなくなってから。

両親はけして姉を虐げるつもりで医療にかからせなかったわけではなかった。ただ昭和の終わりごろの価値観で娘に精神病歴をつけたくなかったのだろう。彼女が医学部に入れるほど優秀だったからなおのこと。だからこそ著者は問いかける。どうすればよかったのか、と。（牧）

## 成長への第一歩

冬季オリンピックやWBCの感動も記憶に新しい中、今年はサッカーW杯など多くの国際競技大会が開催されます。スポーツ観戦が好きな私にとっては楽しみな一年ですが、いつの頃からか敗者に思いをはせることが多くなりました。

競技スポーツにおいて勝者は一人（またはチーム）です。ご紹介する『意味ある敗北とは何か』では大谷翔平、羽生結弦、国枝慎吾、池江璃花子等のトップアスリート達が敗北や挫折を通じて、いかにして技術やメンタルを向上させたのか。敗北＝失敗というわけではありませんが、自身を振り返ってみると失敗から学んだことは多かったと感じています。逆境に面した時、いかに自分を鼓舞し、学び、成長につなげていくか。スポーツに限らず心の処方箋となる一冊です。（水）

【書誌情報】・『日本の自然葬』（高橋繁行　著／講談社現代新書）¥1,100・『がんと生ききる』（落合恵子　著／朝日新聞出版）¥1,600
・『どうすればよかったか？』（藤野知明　著／文藝春秋）¥1,500・『意味ある敗北とは何か』（内田若希　著／新潮社）¥1,800　※価格は全て本体価格です。

令和8年 4月5日

# 中田図書新聞

第 82 号

## 地方の食は 魅力の原石

ガストロノミーという言葉自体はローマ時代からあったそうですが、実際広く知れ渡ったのは十九世紀前半、ブリア＝サヴァランというフランス人が著書『美味礼賛』で触れたことからといわれています。「ガストロノミーツーリズム」とは、「五感を刺激し、より幅広い満足感を得られる経験と食文化を求めて旅をすること」を醍醐味とする観光形態で、特に欧米を中心に広がってきました。その「ガストロノミーツーリズム」をこぞって楽しむ世界の富裕層が、何に魅力を感じているのか、日本の地方にはどんな力があるのかが、本書『日本人の9割は知らない 世界の富裕層は日本で何を食べているのか？』には詰まっています。

インバウンドが増加するにつれ、海外の方の姿をみる機会も増えてきたことは多くの方が感じているでしょう。私も富山県の端の出身ですが、観光する海外の方の姿の多さに日々驚いています。正直「そんなに楽しめるものがあるのか？」という思いさえ抱いていましたが、旅に何を見出すのか、今地方を旅する人は都市部では味わえないものを求めていること、そんな宝物を実は地方はもっていることが、各所の奮闘する姿の数々から見えてきます。

本書では地方を盛り上げるための重要なものとして「ヘンタイ」をあげています。ここでは「周囲の評価を気にせず、自分が本当にやりたいことに突き進む人」を指しています。なかなかそんな人に出会うことは稀ですが、もし出会う機会があれば、世界の富裕層だけが楽しむのではもったいない、自分も普通では味わえない体験を求めて一歩踏み込んでみたいと思います。

杉

## 食と人情って なんかいいよなぁ

美味しいものを探すのはスマホの中で十分な世の中になりました。グルメサイトや旅動画などを通じて十分に情報は収集することが可能になりました。いつのまにか自分にとって必要な情報とは、お店の立地や星の数、個室の有無が基準になっていると気が付きました。

『うまい旅』という本は、料理人笠原将弘さんが全国へ出張に行った際に出会った料理やお店が紹介されています。プロの料理人が紹介するのだから、間違いないと期待して手に取ってみました。お店や料理はもちろんのこと、それにまつわるエピソードが大変面白く、途中から笑いながら読み進めていました。一緒に食事した若手営業マンとのやりとりや、一人で食事した際に周囲にいらしたキャラクターの濃いお客さんの行動など気になるエピソードももれなくついてくるのです。店内の写真が掲載されていなくても、そのお店の雰囲気が手に取るように伝わってくる一冊です。

読み進めていくうちにふと気が付いたことがありました。外食とは、料理やお店の良し悪しだけでなく、こうしたそのお店に着くまでの友人たちとの楽しい会話やハプニング、お店の中でのちょっと心温まる心遣いなどすべてをひっくるめて外食であるということです。今年は、スマホはカバンにしまい太田和彦や、この笠原さんの本を手に旅やグルメを楽しんでみようと思いました。

ちなみに、富山県と石川県のエピソードものっていますが、石川のお店については、行かれたことがある方なら「あ～っ、わかる！わかる！」と反応してしまうお話だと思います。

堀

## こういう記録がいい

私は、日記をつけるという習慣を持っていないため、日々を流れるように過ごしている。子供の頃の記憶は断片ではあるが、映像付きで思い出せることが多い。だけれど、ここ十年は、記憶の中の映像も薄らぼんやりで、旅行に行った、楽しい思い出すらも写真をあまりとらないこともあり、曖昧になってきている。これから先、自分の人生を振り返る時、それは寂しいことなのかもしれない。

『5秒日記』は、一日のことをまるまる書かずに五秒のことを二百字で書いている日記。家族とのやりとりや、日々のささいな出来事の一場面を切りとったもの。ほんのわずかなことだけども、その時思った気持ちが日記として残る。そしてそこを起点として思い出されることはきっとそれ以上ではないだろうか。自分以外の日常をのぞき見させてもらいながら、こういう切りとり方で残していく記録は後から読み返しても、きっと温かな思い出として蘇るのだろうなと思う。業務的な日記より、私はこの記録の残し方が好きだ。

湯

## カケオくん 45

【書誌情報】・『季刊日記 創刊号』・『季刊日記 2号』（日記屋月日 発行）いずれも一九八〇円（本体価格）

【書誌情報】・『日本人の9割は知らない 世界の富裕層は日本で何を食べているのか？』（柏原光太郎 著／ダイヤモンド社）¥1,800
・『うまい旅』（笠原将弘 著／光文社）¥1,800・『5秒日記』（古賀及子 著／ホーム社／集英社）¥1,700

※価格は全て本体価格です。